感情体験の分析（V）

—屈辱について—

右　山　裕　一・上　杉　　喬

Analysis of Some Emotional Experiences (5th report):

On Humiliation

Yuichi Migiyama・Takashi Uesugi

This is the 5th report of successive studies on analysis of some emotional experiences. In these studies a special questionnaire was created containing 20 emotional works. Among them are joy, sorrow, anger, hatred, fear, humiliation and so on. The results of this study suggested that the feeling of humiliation springs up when a person encounters something which does harm to his/her pride.

はじめに

本研究は感情研究の第５報であり、屈辱の感情についてそれらの感情を最も強く感じた体験の自由記述に基づいてその感情の特徴を分析するものである。

第１報（上杉喬、榧場真知子、馬場史津 2002）においては、嫉妬、憎い、怒りの感情体験を分析した。その結果、嫉妬体験は①好意・愛情に関する嫉妬②能力に関する嫉妬③モノに関する嫉妬の３種類があり、その嫉妬感情が生起する特徴は、Ａ自分にとって大切なモノ（所有したい好意・愛情、所有したい能力、所有したい物）が、Ｂ自分ではなく、Ｃ身近な人にある（好意・愛情が向けられる、能力を持っている、物を所

有している）という３者関係において、Ｃ身近な人に対して嫉妬感情が生じるというものであった。また、憎い及び怒り体験は①他者からの行為②自分の行為③社会的事象の３種類があり、その憎い・怒り感情が生起する特徴は、Ａ自分にとって大切なモノ（大切にしている人、大切にしている心、大切にしている物）が、Ｂ行為者（他者、自分、社会的事象の行為者）との２者関係において、Ｂ行為者によって、Ａ大切なモノが「奪われる」または「壊される」場合に生じるというものであった。憎いと怒りは類似した特徴を有するが、その違いは憎いが自身の直接的被害と、また怒りがより間接的な被害と結びついている点にあった。

第２報（鈴木賢男、鈴木国威、上杉喬 2002）においては、喜び、悲しいの感情体験を分析した。その結果、喜び及び悲しい体験は①人の存在に係わるもの②モノに係わるもの③心（好意・愛情や充実）に係わるものの３種類があり、喜びの感情はＡ自分にとって大切な人・モノ・心（大切にしている人、大切にしている物、大切にしている心）が、Ｂ自分自身との２者関係において、Ｂ自分自身がＡ大切な人・モノ・心を「得る」場合には喜びが、逆に「失う」場合には悲しみが生じるというもので、その意味で喜びと悲しみはそれが生起する上で「得る⇔失う」の対極的な関係にあることを明らかにした。

第３報（上杉喬、岡本かおり、平宮正志、吉川延代 2003）においては、驚き、寂しい、愛しい、空しいの感情体験を分析した。その結果、驚き体験は①大切なモノ（心・物・能力・人）を得ることに対するもの②大切なモノ（心・物・能力・人）を失うことに対するもの③思いもよらない事実・出来事・考え方に対するもの④思いもよらない大きな変化に対するもの⑤身の危険を感じる出来事に対するものの５種類があり、驚きの感情はＡそれらの出来事が、Ｂ自分自身にとって予想外・想像外・偶然・突然・初めて・稀な場合に驚きが生ずるというものであった。愛し

い体験は、A自分にとって大切なモノ（大切にしている人・物・心）が、B自分との関係で、自分より力が弱く無力で自分を頼りにしていると感じる場合に生ずるというものであり、また寂しい及び空しい体験はA自分にとって大切なモノが、B自分自身に「満たされていない」場合に生じるというものであった。寂しいと空しいは類似した特徴を有するが、その違いは、寂しいが今まであったものが欠けてしまって今は無い状態、空しいは、求めても得られず今も無い状態、と結びついている点にあった。

第4報（鈴木賢男、上杉喬 2003）においては、失望の感情体験を分析した。失望体験は①あるはずのモノ（人・心・物・能力・機会）を失うことに関するもの②期待するモノ（人・物・成果・能力・機会・環境・運）が得られないことに関するもの③直面したくなかったこと（人間性・事件・失敗）に直面することに関するものがあり、失望の感情はそれらの事象が生起した場合に生ずるというものであった。

本研究においても同様に、屈辱の感情が生起する上での特徴を検討するものである。

方法

1．調査質問紙

本研究で使用した質問紙は「体験した感情」として嫉妬、後悔、憎い、満足、屈辱、空しい、愛しい、不安、喜び、苦しい、驚き、恐れ、怒り、寂しい、充実、嫌悪、ためらい、恥ずかしい、悲しい、失望の20感情を挙げ、「あなたの今までの体験の中で次の1から20のような感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して、それがどんな出来事だったのか分かるように書いて下さい。またその出来事がいつ頃（何才位）の事なのかも書いて下さい。」と教示し、「その感情を体験した出来事」を30字程

度のスペースに自由記述するものであった。

2．調査対象・時期・手続き

B大学「感情心理学」の授業を受講した、1999年度（227名）、2000年度（190名）、2001年度（190名）の受講生、合計607名を対象として授業初日に調査用紙を配布し、翌週の授業で回収した。調査は記名式で行った。

3．感情体験時の年齢

1つの出来事に対して1つの年齢が記述されていた人数は517名（85.2%）だった。それ以外は複数の年齢、もしくは年齢に幅（期間）がある記述だった。複数の年齢が記述されていた場合、その感情を強く抱いた初めての年齢（5才、15才→5才）を採用し、年齢に幅があった場合、中央値（高校生→16才）を採用して換算した。

屈辱体験の分類

調査対象者607名のうち、具体的に「屈辱」の内容を明記した者は560名（92.2%）であり、明記しなかった者は47名（7.8%）であった。内容を明記した560名中1名（0.2%）は、その内容を屈辱として理解することが出来なかった（「部屋で一人でぼわっとしているとき」）ため、分析対象外とした。内容を明記しなかった47名中12名（2.1%）は「屈辱体験がない、思い出せない」、1名（0.2%）は「書けない」と記述し、34名（5.6%）は未記入であった。内容を明記した者で「屈辱」を体験した年齢が未記述の者は8名（1.3%）であった。

屈辱体験は「屈辱を感じた対象（何によって屈辱を感じたのか）」によって分類することとした。

1．屈辱を感じた対象による分類

「屈辱」体験を明記した559名の体験内容を「屈辱を体験した対象（何によって屈辱を感じたのか)」で分類した結果、「Ⅰ．侮辱に関するもの」「Ⅱ．恥辱に関するもの」「Ⅲ．敗北に関するもの」「Ⅳ．大失敗に関するもの」の４分類に分けることができた。さらに「Ⅰ．侮辱に関するもの」は10のカテゴリー、「Ⅱ．恥辱に関するもの」は５のカテゴリー、「Ⅲ．敗北に関するもの」は11のカテゴリー、「Ⅳ．大失敗に関するもの」は３のカテゴリーに分けられ、合計29のカテゴリーに分けることができた。そしてカテゴリー「怒られた」を「公衆の面前」でされたものは「Ⅱ．恥辱に関するもの」に、それ以外は「Ⅰ．侮辱に関するもの」に分類した。(※(　)内の数字は体験時の年齢を示す。)

Ⅰ．侮辱に関するもの

1）侮辱された：「男の人に自分の欠点を指摘されとき（20)」「友人にお前はいびつだと言われたとき（16)」「バイト先の店主に屈辱的なことを言われた（20)」など。

2）馬鹿にされた：「大嫌いな人に馬鹿にされ、言いふらされたとき（９)」「漫画を書いたことのないやつらに自分の絵が下手だと馬鹿にされたとき（16)」など。

3）いじめられた：「クラスで仲良しだった友人たちに仲間はずれにされたとき（13)」「友達に無視されたこと（14）」など。

4）裏切られた：「親友に裏切られたとき（18)」「彼氏に浮気されたこと（18）」など。

5）見下された：「父親が私を自分の偏見と差別にもとづいた目でしか見ていないと悟ってしまったとき（５)」「バイト先のオーナーに悪

気はないが、女は結局男に勝てないと断言されたとき（14)」など。

6） 悪者にされた:「自分がしたわけではないのに悪く言われたとき(中学校でものがなくなったとき）(15)」「友達から一方的に嫉妬された上に、話に入れてもらえなかったとき（19）」など。

7） 自分を否定された：「父に自分の考えを否定されたこと（13)」「好きな人に告白して振られたとき（19）」など。

8） 怒られた（※「Ⅱ．恥辱に関するもの」にも分類される）:「教習所で教官に注意ばっかされたとき。(20)」「センター試験で、点が取れなくてお母さんにメチャメチャ言われたとき（19)」など。

9） 粗末に扱われた：「国立大に入った友達には「おめでとう」と言った先生が、私立大に入った人には「そう」で終わらせていたこと(18)」「親戚の家に行った時、喘息の発作を起こして親に「迷惑かけたんだから謝れ」と言われた時（17）」など。

10） 強要された:「いわれのない喧嘩をふっかけられ、土下座を強要（拒否）(15)」「部活の先生の方針で坊主を強制され反対したが、結局無理矢理されたこと（13)」など。

Ⅱ．恥辱に関するもの

1） ハラスメント：「痴漢に遭ったとき（15)」「バイトの上司が何でも私の責任にし、さらにぐちぐちと説教してくる（20）」など。

2） 辱めを受けた：「先生に答えが間違っているのに黒板に書かされ、クラス中にどこが駄目なのか批判された時（７)」「弟にチンパンジーに似ていると言われたせいで、中学のあだ名が「チンパン」になってしまったこと（14)」など。

3） コンプレックス：「小四まで、ずっとかなずちで、それまでずっとプールでは劣等生だった時（５)」「私が学校を辞めていて、兄が学

校に行っていたこと（20)」など。

4） ふがいなかった：「頑張ってやっているのに、失敗する度にがっかりさせられた（19)」「バイト先で、初めの頃仕事が覚えられなかったこと（18）」など。

5） 怒られた（※「Ⅰ．侮辱に関するもの」にも分類される）：「小学校のころ、アイスを盗んだことが担任の先生にばれて、その事を、クラスみんなの前で言われ、みんなの前で怒られたとき（7)」「中学のときの部活（吹奏楽）の練習中に、演奏中に名指しで非難されたとき（14)」など。

Ⅲ．敗北に関するもの

1） 同格に負けた：「ライバルに負けたとき（15)」「友人よりテストの点数が低かった（18）」など。

2） 格下に負けた：「高校の部活の試合で自分より学年が下の人にぼろ負けしたとき（17)」「自分より力が下の相手にスポーツで負けたとき（14）」など。

3） 僅差で負けた：「0.03秒差で負けて上の大会に出られなかった（14)」「漢字テストでずっと満点者が２人になっていたのに、ちょっとしたミスで満点を逃してしまいその人に負けたと思ったこと（8)」など。

4） どうしても勝てない：「中学の部活、どんなに頑張っても勝てなくて（14)」「高校の時、剣道部に入っていて、年に何度か、K高校と練習試合をするのですが、K高校にいる自分のライバルに引退するまで一度も勝てず、ひどい屈辱受けた（16)」など。

5） どうすることもできなかった：「秘密にしていたことを知られてしばらく相手に逆らえなかったこと（11)」「自分の嫌いなやつに、聞

かなければならなかったとき、頼らなければならなかったとき(10)」など。

6）自分だけ負けた：「部活の駅伝メンバーに自分だけ入れなかった(12)」「友人３人と試験を受けて私だけ落ちた（15）」など。

7）最後で負けた：「中学の時、最後の大会で負けたこと（15)」「短距離走で、それまで男の子に負けたことがなかったのに、最後の最後で、男の子に抜かれたこと（12)」など。

8）プライドが傷ついた：「他の人には絶対負けないと思っていた自分の特技で、自分よりも上手な人がいたこと（18)」「自分の上にはもっと実力がある人がたくさんいると感じたとき（14)」など。

9）完全に負けた：「部活の試合でまったく歯が立たずに負けたこと(12)」「勉強できる人に、散々自慢されて、勉強で勝負挑んで、完敗して、挙げ句の果てにいわれたい放題だった時など（14)」など。

10）きょうだいに負けた：「初めてのテストで姉とは比べ物にならないくらい悪かった時（12)」など.「妹の方が学校で人気が高かった(11)」など。

11）嫌いな人に負けた:「嫌いな人が自分よりいい大学に合格したのを知ったとき（19)」「自分の好ましくない人に負けたとき（14)」など。

Ⅳ．大失敗に関するもの

1）自分の力が及ばなかった：「自分の得意な科目のテストで、ひどい点数をとったこと（14)」など。「教習所で、皆が落とさない単元を落としたとき（21)」など。

2）受験に失敗した：「大学の志望校を絞って、浪人までしたけど、第１志望に落ちた（19)」「絶対合格すると言われていた高校に受験で落ちたこと（15)」など。

3） 考えられないミスをした：「みんなの前で答えを間違えてしまったとき（9）」「人におごってあげよう思ったら、金が足らずにおごってもらったとき（20）」など。

2．屈辱場面による分類

「屈辱」体験を明記した559名の体験内容を「屈辱を体験した場面」で分類した結果、以下の4分類となった。

尚、スポーツの試合などは公衆の面前ではあるが、対戦相手に屈辱を感じているため「対面」として分類した。「単独」は自分が自らに対して屈辱を感じたことを意味する。

1） 公衆の面前：「学校のクラスのみなの前で怒られた時（12）」「みんなの前で答えを間違えてしまったとき（9）」など。
2） 対面：「彼に別れを告げられたこと（19）」「小学校の野球の試合で格下のチームに負けた（12）」など。
3） 単独：「テストで10点（100点満点）を取る（6）」「パソコンを買ったのはいいけれど、いまだにいまいち使いこなせていない。授業をとったにもかかわらず（20）」など。
4） 自分不在：「一生懸命皆をまとめたのに影で文句を言われたとき（17）」「気に入らない友人に自分の秘密をいろいろばらされたとき（11）」など。

結果

1．屈辱体験の「対象（何によって屈辱を感じたのか）」分布

表1に「屈辱対象」によって分類した4分類と29のカテゴリー分布を示す。

1）４分類の出現頻度

「Ⅰ．侮辱に関するもの」の出現頻度は227名（40.6%）、「Ⅱ．恥辱に関するもの」が100名（17.9%）、「Ⅲ．敗北に関するもの」が180名（32.2%）、「Ⅳ．大失敗に関するもの」が52名（9.3%）であった。

2）「Ⅰ．侮辱に関するもの」における各カテゴリーの出現頻度

１位は「侮辱された」で57名（10.2%）、以下２位「馬鹿にされた」が56名（10.0%）、３位「いじめられた」が26名（4.7%）、４位「裏切られた」が18名（3.2%）、５位「悪者にされた」が17名（3.0%）、６位「自分を否定された」が14名（2.5%）、７位「見下された」が13名（2.3%）が、８位「怒られた」が12名（2.1%）、９位「粗末に扱われた」が10名（1.8%）、10位「強要された」が４名（0.7%）であった。

3）「Ⅱ．恥辱に関するもの」における各カテゴリーの出現頻度

１位は「ハラスメント」で36名（6.4%）、以下２位「辱めを受けた」が36名（6.4%）、３位「コンプレックス」が10名（1.8%）、４位「ふがいなかった」が９名（1.6%）、同じく４位「怒られた」が９名（1.6%）であった。

4）「Ⅲ．敗北に関するもの」における各カテゴリーの出現頻度

１位は「同格に負けた」で63名（11.3%）、以下２位「格下に負けた」が56名（10.0%）、３位「どうしても勝てない」が10名（1.8%）、４位「僅差で負けた」が10名（1.8%）、５位「どうすることもできなかった」が９名（1.6%）、６位「自分だけ負けた」が７名（1.3%）、７位「最後に負けた」が７名（1.3%）が、８位「プライドが傷ついた」が６名（1.1%）、９位「完全に負けた」が６名（1.1%）、10位「きょうだいに負ける」が４名（0.7%）、11位「嫌いな人に負ける」が２名（0.4%）であった。

5）「Ⅳ．大失敗に関するもの」における各カテゴリーの出現頻度

1位は「自分の力が及ばなかった」で23名（4.1%）、以下2位「受験に失敗した」が15名（2.7%）、3位「考えられないミスをした」が14名（2.5%）であった。

2．屈辱体験の年令分布

表1の最下段は、屈辱体験を最も強く抱いた体験時の年齢（4～26）を7区分に分けて、区分ごとの出現頻度を示すものである。

屈辱体験全体では、「18～20才」での体験を記述する者が最も多く167名（29.8%）で、以下2位「15～17才」が144名（25.7%）、3位「12～14才」が115名（20.5%）、4位「9～11才」が67名（12.0%）、5位「6～8才」が26名（4.6%）、6位「21～26才」が16名（2.9%）、7位「4～5才」が10名（1.8%）であった。また「いつでも、時々」と記述した者が6名（1.1%）、年令未記入は8名（1.4%）であった。

さらに、比較的年少である年令区分を「4～11才」と1つにまとめるとその出現頻度は103名（18.4%）で、それ以降の「12～26才」は442名（79.1%）であった。

3．屈辱体験の「対象」×「年令」

表1全体は屈辱体験の「対象」と「年令」のクロス表である。「対象」4分類別、「年令」別の構成比は、「18～20才」が「Ⅲ．敗北に関するもの」以外の3分類で最も出現比率が高く、1位「Ⅳ．大失敗に関するもの」（53.8%、28名）、2位「Ⅰ．侮辱に関するもの」（33.5%、76名）、3位「Ⅱ．恥辱に関するもの」（29.0%、29名）であった。「Ⅲ．敗北に関するもの」で最も出現頻度が高かった年令区分は「15～18才」（35.6%、64名）であった。3分類で最も出現比率が高かった「18～20才」におけ

る「Ⅲ．敗北に関するもの」の出現比率は、分類内で３位（18.9%、34名）であった。

また比較的年少である年令区分を「４～11才」と１つにまとめ、それ以降の４区分を同様に「12～26才」として、屈辱体験の「対象」４分類別、「年令」別の構成比は、「４～11才」において最も出現頻度が高かった分類は「Ⅰ．侮辱に関するもの」(21.6%、49名)、２位「Ⅳ．大失敗に関するもの」(21.2%、11名)、３位「Ⅱ．恥辱に関するもの」(20.0%、20名)、４位「Ⅲ．敗北に関するもの」(10.1%、23名）であった。

４．屈辱体験の「男女別」分布

表２の最下段は屈辱を感じた「対象」の出現頻度を男女別に表したものである。

屈辱体験全体における男性の出現頻度は35.2%（197名)、女性の出現頻度は63.9%（357名）であった。また比較的年少である年令区分を「４～11才」と１つにまとめ、その年令区分の中での男性の出現頻度は6.8%（38名）で、女性の出現頻度は11.4%（64名）であった。それ以降の「12～26才」における男性の出現頻度は27.4%（153名）で、女性の出現頻度は50.4%（282名）であった。

５．屈辱体験の「対象」×「男女」

表２全体は屈辱体験の「対象」と「男女」のクロス表である。男性で最も出現比率が高かった対象は、「Ⅲ．敗北に関するもの」(51.4%、91名）で、以下２位「Ⅰ．侮辱に関するもの」(30.8%、70名)、３位「Ⅳ．大失敗に関するもの」(30.0%、15名)、４位「Ⅱ．恥辱に関するもの」(21.0%、21名）であった。女性で最も出現比率が高かった対象は、「Ⅱ．恥辱に関するもの」(78.0%、78名）で、以下２位「Ⅳ．大失敗に関する

もの」(70.0%、35名)、３位「Ⅰ．侮辱に関するもの」(38.3%、155名)、４位「Ⅲ．敗北に関するもの」(48.6%、86名%であった。

考察

１．全体的考察

559名の屈辱体験記述から、屈辱を体験した「対象（何によって屈辱を感じたのか)」について分類した結果、全ての屈辱体験は「Ⅰ．侮辱に関するもの」「Ⅱ．恥辱に関するもの」「Ⅲ．敗北に関するもの」「Ⅳ．大失敗に関するもの」に分けられた。これらはいずれも自分の立場がおとしめられ、もしくは自らおとしめてしまい、その状況に耐え忍ばざるを得ないという部分で共通している。

このことは、屈辱体験が生起するためには１）自分の立場がおとしめられ、もしくは自らおとしめてしまう、２）その状況に耐え忍ばざるを得ない、という２条件が必要十分条件となることを意味する。つまり自分の立場がおとしめられ、もしくは自らおとしめてしまったとしても、その状況に耐え忍ぶ必要がなく、打開もしくは回避することが出来るのであれば、屈辱体験は生じないということになる。

「自分の立場がおとしめられる」とは１）他者から直接的、意図的に働きかけられ生じる場合（ex. いじめられた、ハラスメント）と、２）間接的、結果として生じる場合（ex. 同格に負けた）に分けられる。また「自分の立場を自らおとしめてしまう」とは文字通り他者からの働きかけではなく、本人が原因となるものである（ex. 受験に失敗した)。

さらに屈辱を感じる場合、個人内にその状況を変化させたい、異なる結果にしたいという主観的な意志・願望が存在する。しかしそのことをどうすることもできないため、「耐え忍ばざるを得ない」のである。本人にとってその状況は到底納得できるものではないが、受け入れざるを得

ないことが示唆される。

2.「侮辱」と「恥辱」の相違

本研究において、「侮辱」は他者から意図的に悪意を持って自分の立場がおとしめられるもの（ex. 馬鹿にされた、見下された）と考えられ、「恥辱」は他者から意図的ではあるが、「侮辱」より悪意の程度が軽い(ex. 辱めを受けた、ハラスメント)、もしくは他者からの働きかけによらない場合（ex. ふがいなかった、コンプレックス）があるという点で区別できる。

「侮辱より悪意の程度が軽い」とは、「侮辱」が特定個人の人権を侵害しようとするものであり、それに対して「恥辱」は特定個人の人権を侵害しようとするものではなく、対象が不特定であることを意味する。それは「侮辱」が「公衆の面前」で生じるものではなく、「恥辱」が「公衆の面前」で生じることからも示唆される。

また「恥辱」の各カテゴリーにおいて、「公衆の面前」「単独（自分が自分に対して感じる)」で屈辱を体験するものがあるが、「侮辱」では存在しない。つまり屈辱を体験した場面として「侮辱」の場合「対面（個人対個人)」が主であり、「恥辱」の場合「公衆の面前」「対面（個人対個人)」「単独（自分が自分に対して感じる)」と多岐にわたるところも大きな相違である。

3. 屈辱対象と年令との関係

屈辱体験は「対象（何によって屈辱を感じたのか)」から４つに分類されることが分かったが、その中で最も出現頻度が高かった分類は「Ⅰ. 侮辱に関するもの」であり、このことは全体的に他者から侮辱されることが他の分類よりもよりも屈辱体験の生起を促すことを意味する。また

２位の「Ⅲ．敗北に関するもの」と合わせれば70％強を占め、この２分類が屈辱の中での大きな軸と言える。以下、各分類と年令との関係を考察する。

「Ⅰ．侮辱に関するもの」については「18～20才」（33.5％）が他の時期よりも10％以上高く、また年令と比例して高くなる傾向が見られた。つまり精神的・肉体的に成長するにつれて、他者の侮辱によって屈辱をより体験するようになると考えられる。各カテゴリーについても同じような結果が見られたが、「いじめられた」は「９～11才」における出現頻度が突出して高く（11名／26名）、「いじめ」による屈辱は幼少期により体験されることが示唆される。また「裏切られた」（13名／18名）、「悪者にされた」（８名／17名）、「自分を否定された」（８名／14名）は「18～20才」における出現頻度が突出して高く、この時期は単純に悪態をつかれるだけではなく、人間関係を崩壊させるような、もしくは自分が大切にしているモノ（人、物、信念）を汚されるような行為によって、より屈辱を体験する傾向があることが示唆される。

「Ⅱ．恥辱に関するもの」については「18～20才」（29.0％）において最も出現頻度が高かったが、「12～15才」（26.0％）「15～17才」（21.0％）における出現頻度とそれほど差は無かった。つまり年少期以降においては「侮辱」とは対照的に、年令に関係なく「恥辱」による屈辱を体験することが示唆される。各カテゴリーについても同じような結果が見られたが、「コンプレックス」（４名／９名）、「ふがいなかった」（５名／10名）は「18～20才」における出現頻度が突出して高かった。このことはこの時期に世間体や自分の能力に対する意識が高まり、それを自ら悲観してしまう傾向があると考えられるが、母数が少数であるため参考程度にとどめておくべきであろう。

「Ⅲ．敗北に関するもの」において上位を占めたのが「12～15才」

(30.0%)、「15～17才」(35.6%) であり、「18～20才」(18.9%) よりも10%以上高い出現比率であった。その時期の「敗北」の殆どが部活動における試合、レギュラー争いによるものであり、中学・高校において部活動の役割が占める割合が高く、同時にそこにおいて屈辱をより体験するものと考えられる。それは「同格に負けた」(63名／180名中)、「格下に負けた」(56名／180名) の２カテゴリーで全体の約66%を占めることからも示唆される。

「Ⅳ. 大失敗に関するもの」は「恥辱」のカテゴリーとして考えることはできるが、下位分類が発生したため、あえて別分類とした。この分類において最も出現比率が高かった年令区分は「18～20才」(53.8%) で、他年令区分と比べて突出して高い比率を占めている。さらに「自分の力が及ばなかった」(13名／23名)、「受験に失敗した」(12名／15名) の２カテゴリーは他の年令区分と比べて出現頻度が非常に高い。前者は大学生活における学業、バイト、教習所などでの失敗であり、後者は大学受験での失敗を意味する。大学受験で成功した者が大学生活でつまずいたのか、大学受験で失敗した者がさらに大学生活でつまずいているかどうかはこのデータから推測することはできないが、特にこの時期は自らの過ちを内省することが特徴と言えるだろう。ただ「大失敗」の母数が比較的少数 (52名、9.3%) であるため、「大失敗」における特徴にとどめておくべきだろう。

４．屈辱対象と性別との関係

まず今回使用した質問紙に屈辱体験について未記入だった者が全て女性 (7.8%、47名) であったことからも、屈辱体験における性差が伺える。屈辱を体験した全体における男女比は、男性35.2% (197名)、女性63.9% (357名) であった。この割合を基準にして各対象分類について考察する。

「Ⅰ．侮辱に関するもの」は男性35.5%（70/197名）、女性43.8%（155/354名）であり、分類自体は全体と比べてそれほど男女差は無かった。しかし人数が10名以上の各カテゴリーについてみると、「いじめられた」（男性４名、女性22名）、「悪者にされた」（男性０名、女性17名）、「見下された」（男性１名、女性12名）、「怒られた」（男性０名、女性12名）において明らかに女性の出現比率の方が高く、逆に「馬鹿にされた」（男性30名、女性24名）、「自分を否定された」（男性８名、女性６名）では男性の出現比率の方が高い。このことは単純に悪口を言われる、もしくは自分の信念が受け入れられない場合に男性は屈辱を感じやすく、陰湿で、不当な仕打ちを受けた場合に女性は屈辱を感じやすいことを示唆するものである。ちなみに恋愛に関する屈辱は女性だけが体験していた。

「Ⅱ．恥辱に関するもの」は男性10.7%（21/197名）、女性22.0%（78/354名）であり、この分類に関しては比較的女性の方が屈辱を感じやすい傾向が見られる。各カテゴリーも同様の傾向が見られた。「ハラスメント」はセクハラを含んでいるため当然女性が屈辱を感じやすいものと言える。

「Ⅲ．敗北に関するもの」は男性46.2%（91/197名）、女性24.3%（86/354名）であり、この分類に関しては明らかに男性の方が屈辱を感じやすい傾向が見られる。各カテゴリーも同様の傾向が見られた。自分の立場が相手よりも下になる、また下の立場の者と立場が逆転することを目の当たりにした場合、男性の方がより屈辱を体験することが示唆される。

「Ⅳ．大失敗に関するもの」は男性7.6%（15/197名）、女性9.9%（35/354名）であり、分類自体は全体と比べてそれほど男女差は無かった。各カテゴリーも同様の結果を示した。

【参考文献】

Plutchik, R., The multifactor-analytic theory of emotion, Journal of Psychology, 50, 153-171, 1960

上杉喬　感情イメージの研究　人間科学研究　第３号22-38 1981

上杉喬　感情イメージの研究（Ⅱ）―労働場面における感情イメージ―人間科学研究　第４号別冊29-40 1983

上杉喬　感情イメージの研究（Ⅲ）―労働場面における感情イメージの諸関連―人間科学研究　第５号別冊11-20 1984

上杉喬　感情イメージの研究（Ⅳ）―対象による違いと性による違い―人間科学研究　第11号1-11 1989

上杉喬　感情イメージの研究（Ⅴ）―SD 法による感情イメージの検討―人間科学研究　第20号68-77 1998

上杉喬・鈴木賢男　感情イメージの研究（Ⅵ）―感情価とパーソナリティー特性との関連―生活科学研究　第22号121-132 2000

上杉喬・榧場真知子・馬場史津　感情体験の分析―嫉妬・憎い・怒りについて―生活科学研究　第24号25-40 2002

鈴木賢男・鈴木国威・上杉喬　感情体験の分析（Ⅱ）―喜び・悲しいについて―言語と文化　第15号42-66 2002

上杉喬・岡本かおり・平宮正志　感情体験の分析（Ⅲ）―驚き・寂しい・愛しい・空しいについて―生活科学研究　第25号61-89 2003

鈴木賢男・上杉喬　感情体験の分析（Ⅳ）―失望について―人間科学研究　第25号63-75 2003

表1．屈辱体験の状況別分布と年令別分布

状況	NO.	内容	度数	%	年齢区分 4～5	6～8	9～11	12～14	15～17	18～20	21～26	常に	未記入
Ⅰ．屈辱	1	侮辱された	57	10.2		2	9	10	12	15	4	1	4
	2	馬鹿にされた	56	10.0	3	1	7	4	19	18	2	2	
	3	いじめられた	26	4.7		4	11	4	4	2	1		
	4	裏切られた	18	3.2			1	2	2	13			
	5	悪者にされた	17	3.0	1	3		1	1	8	2	1	
	6	自分を否定された	14	2.5				3	3	8			
	7	見下された	13	2.3	1		1	4	5	2			
	8	怒られた	12	2.1		1	2	1	3	4	1		
	9	粗末に扱われた	10	1.8		1	1	1	1	5	1		
	10	強要された	4	0.7				2	1	1			
	小計		227	40.6 (%)	5 2.2	12 5.3	32 14.1	32 14.1	51 22.5	76 33.5	11 4.8	4 1.8	4 1.8
Ⅱ．恥辱	1	ハラスメント	36	6.4		1	4	11	8	11			1
	2	辱めを受けた	36	6.4	2	2	6	9	7	9			1
	3	ふがいなかった	10	1.8				2	2	5	1		
	4	怒られた	9	1.6	1	2		3	3				
	5	コンプレックス	9	1.6	1	1		1	1	4	1		
	小計		100	17.9 (%)	4 4.0	6 6.0	10 10.0	26 26.0	21 21.0	29 29.0	2 2.0		2 2.0
Ⅲ．敗北	1	同格に負けた	63	11.3		3	9	17	19	10	1	2	2
	2	格下に負けた	56	10.0			1	16	22	17			
	3	どうしても勝てない	10	1.8			2	2	6				
	4	僅差で負けた	10	1.8		1	2	3	3	1			
	5	どうすることもできなかった	9	1.6			3	2	3	1			
	6	自分だけ負けた	7	1.3				2	4	1			
	7	最後に負けた	7	1.3				3	3	1			
	8	プライドが傷ついた	6	1.1				3	1	2			
	9	完全に負けた	6	1.1				4	2				
	10	きょうだいに負けた	4	0.7			2	1	1				
	11	嫌いな人に負けた	2	0.4				1		1			
	小計		180	32.2 (%)		4 2.2	19 10.6	54 30.0	64 35.6	34 18.9	1 0.6	2 1.1	2 1.1
Ⅳ．大失敗	1	自分の力が及ばなかった	23	4.1		1	2	2	3	13	2		
	2	受験に失敗した	15	2.7					3	12			
	3	考えられないミスをした	14	2.5	1	3	4	1	2	3			
	小計		52	9.3 (%)	1 1.9	4 7.7	6 11.5	3 5.8	8 15.4	28 53.8	2 3.8		
合計			559	100 (%)	10 1.8	26 4.7	67 12.0	115 20.6	144 25.8	167 29.9	16 2.9	6 1.1	8 1.4

表2．屈辱体験の状況別分布と男女別分布

状況	NO.	内容	度数	%	年齢区分 男性 4～11	男性 12～26	男性 常に	男性 未記入	男性 小計	女性 4～11	女性 12～26	女性 常に	女性 未記入	女性 小計
Ⅰ．屈辱	1	侮辱された	57	10.3	4	12	1	3	20	7	29		1	37
	2	馬鹿にされた	54	9.8	7	23			30	4	18	2		24
	3	いじめられた	26	4.7	2	2			4	13	9			22
	4	裏切られた	18	3.3	1	3			4		14			14
	5	悪者にされた	17	3.1						4	12	1		17
	6	自分を否定された	14	2.5		8			8		6			6
	7	見下された	13	2.4		1			1	2	10			12
	8	怒られた	12	2.2						3	9			12
	9	粗末に扱われた	10	1.8	2				2		8			8
	10	強要された	4	0.7		1			1		3			3
	小計		225	40.8	16 22.9	50 71.4	1 1.4	3 4.3	70 100.0	33 21.3	118 76.1	3 1.9	1 0.6	155 100.0
Ⅱ．恥辱	1	ハラスメント	36	6.5	2	5			7	3	25		1	29
	2	辱めを受けた	36	6.5	3	6		1	10	7	19			26
	3	ふがいなかった	9	1.6		1			1		8			8
	4	怒られた	9	1.6		1			1	3	5			8
	5	コンプレックス	9	1.6	1	1			2	1	6			7
	小計		99	18.0	6 28.6	14 66.7		1 4.8	21 21.0	14 17.9	63 80.8		1 1.3	78 100.0
Ⅲ．敗北	1	同格に負けた	61	11.1	7	22	1		30	5	23	1	2	31
	2	格下に負けた	56	10.2		27			27	1	28			29
	3	どうしても勝てない	9	1.6	1	3			4	1	4			5
	4	僅差で負けた	10	1.8	3	4			7		3			3
	5	どうすることもできなかった	9	1.6	1	1			2	2	5			7
	6	自分だけ負けた	7	1.3		4			4		3			3
	7	最後に負けた	7	1.3		3			3		4			4
	8	プライドが傷ついた	6	1.1		5			5		1			1
	9	完全に負けた	6	1.1		4			4		2			2
	10	きょうだいに負けた	4	0.7	2	2			4					
	11	嫌いな人に負けた	2	0.4		1			1		1			1
	小計		177	32.1	14 15.4	76 83.5	1 1.1		91 100.0	9 10.5	74 86.0	1 1.2	2 2.3	86 100.0
Ⅳ．大失敗	1	自分の力が及ばなかった	21	3.8	1	6			7	1	13			14
	2	受験に失敗した	15	2.7		6			6		9			9
	3	考えられないミスをした	14	2.5	1	1			2	7	5			12
	小計		50	9.1	2 13.3	13 86.7			15 100.0	8 22.9	27 77.1			35 100.0
合計			551 100.0		38 6.9	153 27.8	2 0.4	4 0.7	197 35.8	64 11.6	282 51.2	4 0.7	4 0.7	354 64.2